

親鸞と実存の三段階

——三願転入とキエルケゴールの比較研究——

山 川 重 雄

目 次

序	第一章 親鸞における「親鸞一人」とキエルケゴールの「単独者」について
第一節	親鸞の生涯
第二節	キエルケゴールの生涯
第三節	『教行信証』と『死にいたる病』
第四節	実存とは
第五節	親鸞における「親鸞一人」
第六節	キエルケゴールの「単独者」
第二章	親鸞の三願転入とキエルケゴールの実存の三段階
第一節	三願転入の諸問題
第二節	第十九願とキエルケゴールの絶望
第一項	第十九願
第二項	キエルケゴールの絶望
第三節	第二十願とキエルケゴールの罪
第一項	第二十願
第二項	キエルケゴールの罪
第四節	第十八願とキエルケゴールの信仰
第一項	第十八願
第二項	キエルケゴールの信仰

結 論

序

バブル崩壊後、手応えのある有効な指標が見てだせず、覆い被さる閉塞感の中で、社会も未だその後遺症から脱却することが出来ずにいる。

国内的には、長引く不況、環境破壊、自然災害、世界的には、アメリカの同時多発テロ、イラク戦争、インド洋大津波など、確かなものは混沌だけである。

私自身はというと、社会生活という美名のもとに世俗的野心という鎖に繋がれ、世間という尺度で計量して、競争社会を生きてきた。まさに、良心を世間に切り売りして生きてきたようなものである。この混沌とした時代に、本当に生きていると実感できる生き方をするには、先人の知恵に学び、新しい自己を確立していく必要があると考える。そこで、真摯に悟りを求めた親鸞と真の信仰とは何かを追い続けたキエルケゴールをその思想的深化の過程から比較研究することによって、「人生いかに生きるべきか」という意義を問いたい。

第一章 親鸞における「親鸞一人」とキエルケゴールよ「単独者」について

第一節 親鸞の生涯 *略

第二節 キエルケゴールの生涯 *略

第三節 『教行信証』と『死にいたる病』

『教行信証』は、批判の書という見方もあるが、私は、信仰の書と捉え、『死にいたる病』は、希望の書であると考ええる。

『教行信証』は、信から自己へという方向性をもつ書であり、逆に、『死にいたる病』は、一見、絶望の書のようにあるが、実は信仰に至らしめる自己から信への方向性をもつ希望の書なのである。この両書の性格の相違から親鸞の罪惡意識（信後の罪惡）とキエルケゴールの罪（信以前の罪）の本質に大きな相違が生ずることになる。

第四節 実存とは

鉛筆や消しゴムなら、そこに現実的に存在するのであるが、人間の場合、一人一人かけがえのない自分の存在を意識しながら、その存在の仕方を自分で選んで生きていく現実存在であり、これが「実存」である。

人間は、単独的個人として、単にあるところのあるような事物的存在ではなく、現にある自己から本来的な自己になるという態度、行為が含まれるという仕方で実存するのである。以下、このような自己意識をもって考えていく。

第五節 親鸞における「親鸞一人」

親鸞と実存の三段階

親鸞においては、弥陀から回向される信は、人間的無力性の自覚の上に成立するのであり、「無誰代者」としての私が、自身を罪惡生死の凡夫として自覚されるとき、「親鸞一人」という実存的告白となるのである。

罪惡生死の凡夫という絶対的自己否定の自覚が、絶対者たる弥陀との関係で、弥陀の前で実存的になされるとき、陀仏はその本願によって絶対肯定的に救済するのである。

第六節 キエルケゴールの「単独者」

キエルケゴールの「単独者」の意味は、当初、レギーネに対する呼びかけとしての「かの単独者」であつたものが、コルサル事件を契機として「不誠実な大衆」の対立概念としての「単独者」に発展し、「神の前に立つ単独者」に昇華完成するのである。

親鸞とキエルケゴールの思想の根底に流れる自己意識は、絶対者の前でただ一人という実存的単独者としての自覚であり、その中には、本来的な自己になるという態度、動的行為が含まれており、親鸞においては、三願転入という信的發展を遂げ、キエルケゴールでは、絶望から罪へと自己意識の上昇とともに深化し、ついに信仰へ到達するのである。

それでは、このことを次ぎに具体的に考察する。

第二章 親鸞の三願転入とキエルケゴールの実存の三段階

第一節 三願転入の諸問題 *略

第二節 第十九願とキエルケゴールの絶望

第十九願は、機が修する万行諸善の量によってその往生の確実性が決定される世界である。それは、自己が修する万行諸善により本来の自己になろうとする関係、それも一定の固定的関係でなく、相反する、あるいは相矛盾する二つの関係の間に、関係の仕方に応じて違ったふうになり立つ関係である。であるから、自己はその修した功德の量に応じて、その往生の確実性が決定されるのである。

しかし、親鸞は、善導の『観經四帖疏』の散善義の文を自照して、第二十願へ転入する。

一方、キエルケゴールは、人間は精神であり、精神は自己である。この自己とは、ひとつの関係、その関係それ自身に関係する関係であるとともに、それ自身に関係することにおいて他者(神)に関係するような関係であるという。そして、絶望は精神における病、自己における病なのである。

彼は、『死にいたる病』において、この絶望を意識の度合いに応じて分析する。

絶望は、自己意識の上昇に従って、絶望についての無知の状態からそれを知っている状態へと深化する。しかしながら、絶望は、そ

の自己の中に永遠なものを感じつつも、神という自覚にまで至らない。

絶望における自己意識は、「人間が尺度である自己」という規定の内部での上昇である。

この絶望は、親鸞の第十九願の機の立場に極めて近いと考えられる。

第三節 親鸞の第二十願とキエルケゴールの罪

第二十願は、非常にすぐれた名号を称えることによってその往生の確実性が約束される世界である。それは、修諸功德に絶望した者にとって力強く感じられ、この念仏を専修念仏といわれるのも頷かれるのである。

ここにおいてはじめて、人間が尺度となる世界から念仏が尺度となる世界へと転入したのである。しかし、親鸞は、本願の嘉号をもつておのれが善根となすとして、この願の奥深くに潜む我執を鋭く感じて、第十八願へと転入するのである。我執が人間の内面に深く進み、表面に何の痕跡をも残さないようになった悪魔的な状況がこの世界であり、念仏を尺度とする人間の力がその根底に巣くっている。第二十願の機は、第二のユダのようなものである。彼が、接吻によってイエスを裏切ったように、念仏により陀仏を裏切る。

一方、キエルケゴールの絶望は、神のない状態であったが、彼の罪とは、神のある状態のことであり、しかもこの神の前にあって、

その救済と罪の赦しに躓くのである。即ち、神の前にあって、神を信じないのが罪である。

彼は、罪を思弁的、概念的なものではなく、私の、君の罪として、実存的に捉える。

彼の絶望と罪は、広義では、共に神との関わりが外れている状態であるから絶望の範疇に入るものだが、狭義の意味では、絶望は神との関係がない状態で人間を尺度とし、罪は神の前にあって神を尺度としつつも、神に不従順なのである。

このことより、この罪は、第二十願の機に該当すると考えることができる。

第四節 第十八願とキエルケゴールの信仰

第十八願の信は、得ようとして得られる信ではなく、得ようとして得られないことを深く自覚するところに呼応して弥陀よりあたえられるところの信である。ここに親鸞の獲信の論理の独自性がある。

我々は、ここにおいて初めて弥陀が、絶対者が尺度となる世界に出会うのである。

一方、キエルケゴールの信仰は、神の前で罪人として絶望し、無限の諦めによって、自らの計らいを捨て、神にとって一切が可能であることを信じることである。

人間は、神によって措定された存在であるから、人間は自らの力で自己を絶望から救うことは不可能であり、ここにおいて、自己の

力が全的に否定され、自らの計らいを捨てるとき、逆説的に思イガケモナク神の力によって信があたえられるのである。その信は、神が尺度となっているのであり、親鸞の絶対他力信仰に近いといえよう。

しかしながら、親鸞の信の主体は、弥陀にあるのに対して、キエルケゴールの信仰の主体は、信じるか信じないかの人間の意志的判断にあるのであって、その信仰は、親鸞の絶対他力ではなく、最後まで二元性を含む信仰であるといわねばならない。

結 論

親鸞とキエルケゴールは、それぞれの時代において、その時代の大きな波に揉まれつつも、そこから真実を求める求道心により自己を掘り下げ、真実に至ったと考えられる。

我々は、親鸞の三願転入を考察することにより、

第十九願は、人間の力が尺度となる世界であり、それは、キエルケゴールの絶望に該当する。第二十願は、念仏が尺度となるようにおもわれるが、本願の嘉号をもつておのれの善根とする自己肯定の極限ともいべき世界である。それは、キエルケゴールの罪が、神の前にあって、神を拒否するという自己の力が最高に高まった状態のことであることから考えて、第二十願に該当する。

第十八願は、罪惡が否定されるのではなく、弥陀の前では罪惡が問題とならない世界であるのに対して、キエルケゴールにおいては、

罪はあくまで信に対する存在であり、彼の信仰は罪のなくなった状態が信なのである。

親鸞の罪惡の自覺の深さは、そのまま彼の信心の深さを意味するのに対して、キエルケゴールの罪の深さは、神との溝の深さを意味するのである。

以上より、私は、罪惡意識が否定されるのではなく、弥陀の前では何ら障りとならない親鸞の信こそこの混沌とする現在において、「人生いかに生きるべきか」の答えであると考ええる。

『中論』にみる「空」思想

青 木 正 親

目 次

凡 例
略号表
はしがき

第一章 原始仏教における「空」思想

(1) 「空」のあらまし

(2) 原始仏典にみる「空」

第二章 初期大乘仏教における「空」思想

(1) インド大乘仏教の時代区分と仏典整理

(2) 般若經典類の整理

(3) 『般若心経』の整理

(4) 玄奘訳『般若波羅蜜多心経』「人法統通分」

(5) 「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」

(6) 「色即是空 空即是色」より後に説かれる「空」観

第三章 『中論』の総観

(1) 「中論頌」の注釈諸本の整理

(2) 『中論』の構成

第四章 『中論』における「空」思想

(1) 「中論頌」の「縁起」解釈

(2) 「中論頌」の「二諦」解釈

(3) 「縁起」・「無自性」・「空」と「二諦」並びに「三諦偈」